

# 道元禪師と宏智頌古(二)

## 黒丸寛之

### 第十一則 雲門兩病

拳、雲門大師云、光不<sub>レ</sub>透脱<sub>二</sub>有<sub>二</sub>兩般病<sub>一</sub>。一切処不<sub>レ</sub>明、面前有<sub>レ</sub>物是一。透<sub>二</sub>得一切法空、隱隱地似<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>箇物<sub>一</sub>相似、亦是光不<sub>レ</sub>透脱。又法身亦有<sub>二</sub>兩般病<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>法身<sub>一</sub>為<sub>二</sub>法執不<sub>レ</sub>忘、已見猶存<sub>二</sub>墮<sub>二</sub>在法身邊<sub>一</sub>、是一。直饒透得放過即不可、子細点検将来有<sub>二</sub>甚麼氣息<sub>一</sub>、亦是病。

この公案は、雲門が參禪学道上の用心を示して、我執と法執を兩般の病として斥けたものである。道元禪師には、この本則についての直接的な提唱は見られないが、雲門の「透法身の句」について『永平広録』に二箇所の上堂語が存するの  
で、本稿では間接的な関連事項としてこの本則を取り上げた。  
『永平広録』の上堂語は次の如くである。

上堂。記得、僧問<sub>二</sub>雲門<sub>一</sub>、如何是透法身句。雲門曰、北斗裡藏<sub>レ</sub>身。

師曰、雲門老人只道<sub>二</sub>得法身句<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>道<sub>二</sub>得透法身句<sub>一</sub>。或有<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>大仏如何是透法身句<sub>一</sub>、即向<sub>レ</sub>伊道、法身裡藏<sub>レ</sub>身。下座。(卷第二)  
上堂。記得、僧問<sub>二</sub>雲門<sub>一</sub>、如何是透法身句。門曰、北斗裡藏<sub>レ</sub>身。  
師曰、雲門道也太煞道、祇道<sub>二</sub>得八九成<sub>一</sub>。或有<sub>レ</sub>人問<sub>二</sub>永平如何是透法身句<sub>一</sub>、祇向<sub>レ</sub>伊道、杓<sub>二</sub>三旨釈迦<sub>一</sub>、斗<sub>二</sub>量達磨<sub>一</sub>。(卷第四)

『永平広録』第二卷は大仏寺語録であり、第三卷以下は永平寺語録であるが、禪師は雲門の透法身の句としての「北斗裡に身を藏す」の語は、法身の句の道取であって、透法身の句の道得ではないというのである。すなわち道元禪師からは、雲門の語は法身邊を示したものであるが、更にこれを透脱するところがなければ透法身の句とはならないとするのであって、証上の修行を説く道元禪の面目がよく表れている。この観点からすれば、『宏智頌古』の本則は、修行上の實際の用心を示したものとして参学すべきではあるが、さらに本分上よりする透法身の開演を残している、ということになるであ

ろう。

## 第十二則 地蔵種田

拳、地蔵問ニ修山主、甚処来。修云、南方来。蔵云、南方近日仏法如何。修云、商量浩浩地。蔵云、争如我這裏種田搏飯喫。修云、争奈三界何。蔵云、爾喚甚麼一作三界。

道元禪師は『永平広録』巻第六の上堂語にこの本則を挙げて、次のように述べている。

地蔵和尚、紹修山主、雖恁麼道、永平老漢又有道処。不如下如三界一見、三界入出何妨無内外、遮莫商量浩浩地、世人愛処我何愛。既到這裡畢竟作麼生。良久曰、地蔵和尚春農早、這裡種田搏飯喫。

右の上堂語は『石頭和尚草庵歌』の「住庵人鎮常在、不属中間与内外、世人住処我不住、世人愛処我不愛」（大正五一・四六一C）の句に基づいて「不如三界見三界」の境地から、地蔵和尚の平常底の仏法を挙揚したものである。この本則について宏智頌古では「種田搏飯家常事、不<sub>レ</sub>是飽参人不<sub>レ</sub>知、参飽明知無<sub>レ</sub>所求」と頌しているが、『永平広録』では「既<sub>レ</sub>到<sub>レ</sub>這<sub>レ</sub>裡<sub>レ</sub>畢竟作麼生」として「這<sub>レ</sub>裡<sub>レ</sub>種<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>搏<sub>レ</sub>飯<sub>レ</sub>喫」と述べているように、飽参に至る時節を俟たず、直下に諸法実

道元禪師と宏智頌古（黒丸）

相の行履が示されていることは、証を離れぬ修こそ仏法の真髓であることを指摘されたものといえよう。

## 第十三則 臨濟瞎驢

拳、臨濟將<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>囑<sub>レ</sub>三聖。吾遷化後不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>却吾正法眼蔵。聖云、争敢滅<sub>レ</sub>却和尚正法眼蔵。濟云、忽有<sub>レ</sub>人問<sub>レ</sub>汝作麼生对。聖便喝。濟云、誰知吾正法眼蔵向<sub>レ</sub>這瞎驢邊<sub>レ</sub>滅却。

『臨濟録』の「行録」に収録されている右の本則は、『正法眼蔵』では「仏道」の巻に引用されている。「仏道」の巻では、道元禪師が宗名を否定する因みに、臨濟が遷化に臨んで「吾が正法眼蔵を滅却することを得ざれ」と囑して、「吾が禅宗」とも「吾が臨濟宗」とも言わなかったことを中心として説かれているが、この本則に関する提唱は次の如くである。

たとひ滅却は正法眼蔵の理象なりとも、かくのごとく付属するなり。向<sub>レ</sub>這瞎驢邊<sub>レ</sub>滅却、まことに付属の誰知なり。臨濟門下には、ただ三聖のみなり。法兄法弟におよぼし、一列せしむべからず、まさに明窓下安排なり。臨濟三聖の因縁は仏祖なり。今日臨濟の付属は、昔日靈山の付属なり。

臨濟と三聖の因縁は仏祖の行業として称揚され、臨濟によつて「誰知吾正法眼蔵向<sub>レ</sub>這瞎驢邊<sub>レ</sub>滅却」と道破された正法

眼蔵の付属は、釈尊の靈山会上における正法眼蔵涅槃妙心の付属に異ならないとされる。その仏法相承の源流として伝承される靈山の付属については、これを主題として『正法眼蔵優曇華』の巻が撰述され、また「面授」の巻、「仏道」の巻、および「密語」の巻等においてその宗教的意義が明らかにされている。

### 第十八則 趙州狗子

拳、僧問ニ趙州、狗子還有ニ仏性ニ也無。州云、有。僧云、既有、為ニ甚麼ニ却撞ニ入這箇皮袋。州云、為他知而故犯。又有僧問、狗子還有ニ仏性ニ也無。州云、無。僧云、一切衆生皆有ニ仏性、狗子為ニ什麼ニ却無。州云、為伊有業識在。

趙州狗子の公案は、いわゆる無字の公案として中国・日本の禅界に普く知られるが、宏智頌古の本則では、有仏性と無仏性の公案から成っている。道元禪師は『正法眼蔵仏性』の巻で、趙州の「有」と「為他知而故犯」、および「無」と「為伊有業識在」の道著について拈提し、仏性の本質を明らかにしている。「仏性」の巻の該当箇所を抜萃してみると、先ず「有」の意味について、

この有の様子は、教家の論師等の有にあらず、有部の論有にあらずるなり。すすみて仏有を学すべし。仏有は趙州有なり、趙州有

は狗子有なり、狗子有は仏性有なり。

と説かれるように、この有は「仏有」すなわち「仏性有」であるとされる。したがって、それは有無の有でないことは明らかであり、悉有仏性（悉有は仏性）に於ける有仏性の意味と解してよいであろう。そして、この有に関連する趙州の「為他知而故犯」とは、

この語は世俗の言語として、ひさしく途中に流布せりといへども、いまは趙州の道得なり。いふところは、しりてことさらをかすとなり。……知而のゆえに故犯あるべきなり。しるべし、この故犯、すなはち脱体の行履を覆蔵せるならん、これ撞入と説著するなり。脱体の行履、その正当覆蔵のとき、自己にも覆蔵し、佗人にも覆蔵す。

と開演され、知而故犯とは脱体の行履——すなわち仏性自体のはたらきを示した言葉として拈提されている。

次に趙州の「無」に就いては、

趙州いはく、無。この道をききて習学すべき方路あり。仏性の自称する無も恁麼道なるべし、狗子の自称する無も恁麼道なるべし、傍觀者の喚作の無も恁麼道なるべし。その無わづかに消石の日あるべし。

として、無の恁麼時には仏性も無、狗子も無、傍觀者もまた無であるという、無の尽界（消石の日）が説かれる。言うまでもなく、この無は絶対無、すなわち無限絶対の事実をいう

ものである。そして、無の様相が「為佗有業識在」とされる所以は、

この道旨は、為佗有は業識なり、業識有、為佗有なりとも、狗子無、仏性無なり。業識いまだ狗子を会せず、狗子いかでか仏性にあはん。たとひ双放双収すとも、なほこれ業識の始終なり。

という如く、為佗有は業識——すなわち狗子が業識有即仏性無として、それ自体が絶対的な生命の真相であることを指摘されている。この宗旨の開演は『永平広録』巻一の上堂にも、上堂云、但看業識太茫茫、一切衆生無仏性。下座。

の語が見られ、一切衆生の業識茫茫の現実の他に、衆生に内在し或は衆生を超越するがとき仏性はある得ないことが示されている。

『永平広録』には又、次の上堂語と頌古二首が存する。

上堂。拳<sub>二</sub>趙州狗子無仏性、狗子有仏性<sub>一</sub>了、師乃曰、今日永平有<sub>二</sub>三山偈。龜毛兎角非<sub>二</sub>同類、春日花明如<sub>二</sub>月開、業識性將<sub>二</sub>諸仏性<sub>一</sub>、趙州主丈一条来。

全身狗子全身仏、箇裡難<sub>レ</sub>論有也無、一等壳来還自買、莫<sub>レ</sub>憂折本又偏枯。

有無二仏性、不<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>衆生命、雖<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>酪成<sub>二</sub>蘇、猶如<sub>二</sub>滅尽定<sub>一</sub>。

(卷第九)

以上の所説によって見るに、道元禪師は趙州狗子の公案に就いては、原典に従って有仏性・無仏性の宗義をのべて、い

道元禪師と宏智頌古(黒丸)

わゆる無字の公案として重視された「無」の一面のみを、特に取り上げて論ずることはなかったことを窺うことができる。

### 第十九則 雲門須弥

拳、僧問<sub>二</sub>雲門<sub>一</sub>、不起一念還有<sub>レ</sub>過也無。門云、須弥山。

この本則に就いての宏智禪師の頌は次のようである。

不起一念須弥山 韶陽法施意非<sub>レ</sub>慳 肯来両手相分付 擬去千尋不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>攀 滄海濶 白雲閑 莫<sub>レ</sub>將<sub>二</sub>毫髮<sub>一</sub>著<sub>二</sub>其間<sub>一</sub> 仮鶏声韻難<sub>レ</sub>謾<sub>レ</sub>我 未<sub>二</sub>肯模胡放<sub>二</sub>過閑<sub>一</sub>

宏智頌古では、最初に不起一念の当体が雲門のいう須弥山であることを示し、「還って過有りや、また無しや」と第二念に互った僧の問に対して、第四句に「擬し去らば千尋攀づべからず」として擬滞することを戒め、次いで「滄海濶く白雲閑なり」と須弥山の風光をのべている。

道元禪師は『永平広録』巻一にこの公案を挙げて、須弥山也須弥山 親見<sub>二</sub>拈花<sub>一</sub> 自破顔一念百年三万日 樵夫消息在<sub>二</sub>山間<sub>一</sub>

と説き、雲門において「須弥山」として表現された本来の面目は、釈尊の拈華の時節には迦葉の破顔微笑となり、また樵夫の面目は山を離れることがないように、常に「須弥山」の

万里一条鉄であることを明らかにしている。

## 第二十則 地藏親切

挙、地藏問ニ法眼、上座何往。眼云、迤邐行脚。蔵云、行脚事作麼生。眼云、不知。蔵云、不知最親切。眼豁然大悟。

『永平広録』にこの本則を提唱した上堂語と、頌古一首が収録されている。すなわち上堂語では、本則に続いて

師云、若是興聖、向ニ地藏和尚道。不知是最親切、知也最親切、

親切ニ在最新親切。且問、親ニ切箇甚麼。

と説き、また頌古には

騰騰了了又騰騰 行脚何関曲直繩 若欠ニ大成方一寸 其知弥少  
二三升 (卷第一) (卷第九)

と詠んでいる。道元禪師が「不知是最親切、知也最親切」とのべているのは、薬山惟儼が「兀兀地の思量は什麼ぞ」との問に対して「思量は箇の不思量底なり」と言ったことばを想起させる。薬山のいう思量（知）と不思量（不知）とは、もとより相対的關係にあるのではなく、兀兀地（打坐）の思量が不思議であることを示しているものであり、右の上堂語では「且らく問う、箇の甚麼にか親切なるや」という「甚麼」こそ参究すべき課題である。『正法眼蔵偏参』の巻に、

偏参の宗旨、ただ玄沙に参学すべし………雲巖道吾等、在薬山

四十年のあひだ功夫参学する、これ偏参なり、二祖そのかみ嵩山に参学すること八載なり、皮肉骨髓を偏参しつくす、偏参はただ只管打坐身心脱落なり。

と提唱されていることは、偏参行脚の本質を明らかならしめるものであると同時に、本則に於ける地藏の「不知是最親切」の語は、道元禪師の宗義からは「只管打坐・身心脱落」の世界に契当するものと見ることができよう。

## 第二十一則 雲巖掃地

挙、雲巖掃地次、道吾云、太区区生。巖云、須知有下不  
区区者。吾云、恁麼則有ニ第二月也。巖提ニ起掃帚云、這箇是第幾月。吾便休去。玄沙云、正是第二月。雲門云、奴見婢殷勤。

右の本則に基づく宏智禪師の頌古は次のようである。

借来聊爾了ニ門頭 得用随ニ宜即便休 象骨巖前弄ニ蛇手 見時  
做処老知羞

この頌では、第一句に雲巖の掃地を、第二句に道吾の月の話頭を、第三句と第四句に玄沙と雲門について、それぞれの宗意をのべている。第三、第四句は雪峰看蛇の公案（宏智頌古第二十四則）における玄沙と雲門の対応のことを頌したものであるから、この本則の宏智頌古は、四人の禅者を点検し

評価したものになっている。

道元禪師は『永平広録』巻第九に、『景德伝燈録』に拠つてこの公案を掲げ、

誰人掃<sub>レ</sub>地更看<sub>レ</sub>月 禿帚放<sub>レ</sub>光透<sub>二</sub>大虚<sub>一</sub> 千万月中重<sub>二</sub>此月<sub>一</sub> 縦云<sub>二</sub>第二<sub>一</sub>又何初 (流布本)

と頌している。宏智頌古では雲巖の掃地について「借り来つて聊爾として門頭を了す」とのべているのに対して、道元禪師は「禿帚光を放つて大虚に透る」とし、また道吾のいう月について前者が「用ゆることを得、宜しきに随つてすなわち休す」と詠んでいるのに対し、禪師は「千万月中に此月を重ぬ」となしているように、この商量における掃地・看月を第一義の仏法として示していることが明らかである。また『永平広録』では、玄沙と雲門の著語については言及していないが、その方がこの公案の原形に即するものと思われる。

### 第二十三則 魯祖面壁

挙、魯祖凡見<sub>二</sub>僧来<sub>一</sub>便面壁。南泉聞云、我尋常向<sub>レ</sub>他道、空劫以前承当、仏未<sub>二</sub>出世<sub>一</sub>時會取、尚不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>一箇半箇<sub>一</sub>、他恁麼驢年去。

宏智頌古と永平広録の頌古は次のごとくである。

淡中有<sub>レ</sub>味 妙超<sub>二</sub>情謂<sub>一</sub> 綿綿若<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>象先<sub>一</sub> 兀兀如<sub>レ</sub>愚<sub>二</sub>兮道貴<sub>一</sub>

道元禪師と宏智頌古(黒丸)

玉雕<sub>レ</sub>文以喪<sub>レ</sub>淳 珠在<sub>レ</sub>淵而自媚 十分爽氣兮清磨<sub>二</sub>暑秋<sub>一</sub> 一片閑雲兮遠分<sub>二</sub>天水<sub>一</sub> (宏智頌古)

吾師独歩<sub>レ</sub>轉身路 数見<sub>二</sub>僧来<sub>一</sub>絶<sub>二</sub>異同<sub>一</sub> 設欲<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>君談<sub>二</sub>得半<sub>一</sub> 還教<sub>二</sub>面壁失<sub>二</sub>他功<sub>一</sub> (永平広録巻九)

本則では魯祖の面壁について、南泉がその真義を説示した内容になっている。宏智頌古は、その本則全体の宗意を文学的に表現したものであるが、永平広録では右の頌古に「魯祖宝雲禪師尋常見<sub>二</sub>僧来<sub>一</sub>便面壁」と題していることから知られるように、魯祖の面壁そのものを詠んでいることが明瞭である。

### 第二十七則 法眼指簾

挙、法眼以<sub>レ</sub>手指<sub>レ</sub>簾。時有<sub>二</sub>二僧<sub>一</sub>同去捲<sub>レ</sub>簾。眼云、一得一失。

『永平広録』に次の上堂語がある。

上堂曰、記得、法眼一日坐次、忽指<sub>二</sub>面前簾子<sub>一</sub>。時有<sub>二</sub>二僧<sub>一</sub>同去卷。法眼曰、一得一失。師曰、永平不<sub>二</sub>恁麼道<sub>一</sub>。良久曰、開<sub>レ</sub>池不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>月、池成月自来。(巻第三)

本則における法眼の「一得一失」の語は、啐啄同時の独自の宗風を發揮したものであるが、それによって学人がすべて宗意を学得しうするというものではない。これに対して道元禪

師の「池を開いて月を待たず、池成って月おのずから来る」の二句は、修行のほかには証果を期さない不染汚の仏法が、特定の対機（本則では二僧）に限られることなく垂示されているものとして注目したい。

第三十則 大随劫火

挙、僧問ニ大随ニ劫火洞然大千俱壞、未審這箇壞不壞。随云、壞。僧云、恁麼則随レ他去也。随云、随レ他去。僧問ニ竜濟ニ劫火洞然大千俱壞、未審這箇壞不壞。濟云、不壞。僧云、為レ甚不壞。濟云、為レ同ニ大千一。

この本則の前半の部分（僧問ニ大随ニから随云随レ他去まで）は、雪竇頌古第二十九則と同一である。雪竇頌古では本則後半の竜濟との問答は存しないから、そこでは「這箇壞か不壞か」の問に対して「壞」としてのみ宗要を示したのを、宏智頌古では同じ質問について「壞」と「不壞」とを併せて示すことよって、この公案の意味を一層明確にしていることが知られる。したがって、それぞれの本則に基づいて詠まれる頌の内容もおのずから異なっている。

宏智頌古

壞不壞

随レ他去也大千界

雪竇頌古

劫火光中立ニ問端ニ

衲僧猶滯ニ兩重関ニ

句裏了無ニ鈎鎖機ニ  
可レ憐一句随レ他語  
脚頭多被ニ葛藤礙ニ  
万里区区独往還  
会不会  
分明底事丁寧照  
知心拈出勿ニ商量ニ  
輪ニ我当行相買売ニ

雪竇頌古では質問せる僧の脚下を点検し、宏智頌古では本則全体の宗意をのべている。これに対して、道元禪師の頌古は次のようである。

披毛戴角同レ他去 劫火洞然不ニ転頭ニ 墨穴死灰消息断 誰能向レ  
此問ニ因由ニ (永平広録第九卷・流布本)

目ニ恨ニ因由ニ 永平広録の流布本と門鶴本では、第三句と第四句、および  
(永平広録第九卷・門鶴本)

第一句の載と戴の字に相違が見られるが、何れも「随他去」の真実義を直下卒直に開演されていることが明瞭である。

第三十六則 馬師不安

挙、馬大師不安。院主問、和尚近日尊位如何。大師云、日面仏月面仏。

雪竇頌古（第三則）と宏智頌古、および永平広録所収の頌

古は次の如くである。

宏智頌古

雪竇頌古

日月面

日月面月面

星流電卷

五帝三皇是何物

鏡對像而無私

二十年来曾苦辛

珠在盤而自轉

為君幾下蒼龍窟

君不見

屈堪述

鉛鎚前百鍊之金

明眼衲僧莫輕忽

刀尺下一機之絹

江西曾有仏

日月以為面

何事未相備

困碁逢敵手

(永平広録第九卷)

雪竇頌古では馬祖の「日月面月面」に就いて、「五帝三皇是れ何物ぞ」という禅月貫休の無罣礙をあらわす語によって生死透脱の境地を示し、第三句以下は学人に対する厳しい提撕となっている。

宏智頌古では「星流れ電巻く」がごとき馬祖の無罣礙自在の心境を、明鏡・珠玉にたとえて頌した後、本来人を意味する百鍊の金・一機の絹を徹見せしめようとの宗意が窺われる。

また道元禅師の頌古では、宏智頌古の明鏡止水の境界をさらに一歩進め、「何事か未だ相備らざる」との本来成仏の立場から、馬祖の日月面月面仏の道取は「碁を困んで敵手に逢う」がごとく、対機に應ずる遊戯三昧の境地としてこれを頌されたものと見ることができよう。

道元禅師と宏智頌古(黒丸)

#### 第四十則 趙州洗鉢

拳、僧問ニ趙州、学人乍入叢林乞師指示。州云、喫粥了也未。僧云、喫了。州云、洗鉢盂去。

『永平広録』第六卷に、右の本則に基づいて次の上堂語がある。

趙州古仏、既恁麼道。永平今有山偈。良久云、翠竹桃花是画図、胡蘆藤種纏、赤鬚胡更胡鬚赤、喫粥了兮洗鉢盂。

この道元禅師の偈を宏智頌古と対比してみると、次のようである。

宏智頌古

永平広録

粥罷令教洗鉢盂

翠竹桃花是画図

豁然心地自相符

胡蘆藤種纏

而今参飽叢林客

赤鬚胡更胡鬚赤

且道其間有悟無

喫粥了兮洗鉢盂

宏智頌古ではこの本則を頌するに、心地相符し而今参飽せるを宗要とする黙照禅の面目が顯著であり、永平広録では翠竹桃花を一幅の画として大自然の実相を証する、我転法・法転我道環の宗風がおのずから闡明である。

#### 第四十七則 趙州栢樹

拳、僧問ニ趙州、如何是祖師西来意。州云、庭前栢樹子。



趙州栢樹子の公案に就いては『正法眼藏』に「栢樹子」の巻があり、『永平広録』には第六巻・第七巻の上堂語と第八巻の小参普説、および第九巻に偈頌二首（流布本）ないし三首（門鶴本）があつて、その宗旨が開演されている。尤も、道元禪師がこの公案を引用された原典は『聯燈会要』（第六巻趙州章）であるとされる（岩波文庫渉典他）が、『趙州禪師語録』の原文は次のようである。

時尙有僧問、如何是祖師西來意。師云、庭前栢樹子。僧云、和尚莫將境示人。師云、我不將境示人。云、如何是祖師西來意。師云、庭前栢樹子。

『宏智頌古』の本則は、この一連の問答の最初の部分だけであるのに対し、道元禪師の著述ではすべて右の全文を提唱されているから、この公案に関しては宏智頌古からの直接的な引用例とはならない。けれどもこの本則は、趙州狗子の公案とともに古来叢林に知られた公案でもあるので、敢てこゝに取り上げることにした。

『正法眼藏栢樹子』では初めに次のように述べている。

この一則の公案は、趙州より起首せりといへども、必竟じて諸仏の渾身に作家しきたれるところなり。たれかこれ主人公なり。いましるべき道理は、庭前栢樹子これ境にあらざる宗旨なり。栢樹子これ自己にあらざる宗旨なり。和尚莫以境示人なるがゆえに、吾不以境示人なるがゆえに。

趙州のいう「庭前の栢樹子」は、境（他）を以て人（自）

に示したのではないことが明らかにされている。すなわち人と境・自と他との相対的立場からは、祖師西來意を示す栢樹子の宗旨は承当されないことを意味している。この趙州の道は、仏法の極意を問う僧の質問に対応したものであるから、世法によっては把握され得ないことは当然であろう。しかし、学人の間には誤つて理解するものが稲麻竹葦の如くであつたという。

近代学人、不<sub>レ</sub>会<sub>二</sub>趙州意、不<sub>レ</sub>学<sub>二</sub>趙州言。深可<sub>二</sub>憐憫<sub>一</sub>者也。或云、趙州為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>学人之一点見解、所以前也。道<sub>二</sub>庭前栢樹子、後頭也。道<sub>二</sub>庭前栢樹子。或云、一切言語悉是說<sub>レ</sub>禪、所以前後同以道<sub>二</sub>栢樹子<sub>一</sub>也。如<sub>レ</sub>是等之輩如<sub>二</sub>稲麻竹葦。然而於<sub>二</sub>趙州道処、將<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>春夢<sub>一</sub>也未<sub>レ</sub>得在。 （永平広録第七巻）

道元禪師は語をついで次のごとく示している。

今有<sub>レ</sub>人問<sub>二</sub>永平如何是祖師西來意、向<sub>レ</sub>他道、蒼波迢迢涉<sub>二</sub>三周。他若道<sub>二</sub>和尚莫<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>境示<sub>レ</sub>人、須<sub>二</sub>向<sub>レ</sub>他道、吾不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>境示<sub>レ</sub>人。他又問<sub>二</sub>如何是和尚不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>境示<sub>レ</sub>人底道、祇向<sub>レ</sub>他道。靈山瞬目豈時節、微笑破顏尙未<sub>レ</sub>休、四五千条花柳巷、二二三万座管絃樓。 （同右）

この上堂示衆では『正法眼藏栢樹子』の巻で述べている對待の關係を超えた世界が詠まれているが、その骨子は『永平広録』第六巻の上堂語においても同一である。

師曰、南無趙州古仏、拈<sub>二</sub>出西來宗旨、西來意若何、庭前栢樹子、不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>境示<sub>レ</sub>人、只將<sub>レ</sub>栢拳似。敢問、諸禪德要<sub>レ</sub>會<sub>二</sub>這箇道理<sub>一</sub>麼。良久曰、莫<sub>レ</sub>將<sub>二</sub>江南橋、喚作<sub>二</sub>江北枳<sub>上</sub>。 （流布本）

(註) 門鶴本では——の部分には次のようである。

趙州古栢立庭前、南北誰疑橋与栢。

祖師西来意は只箇の栢樹子であつて、それは江南の橋を以て江北の栢となすようではならない、と禪師は説かれるのであり、「栢樹子」は彼此對待の關係にないことが明らかにされている。そして『永平広録』第八卷の冬至小參では、一句毎の著語によつて宗要が示され、この公案全体の意義がのべられている。

(師曰以下が禪師の著語)

冬至小參。 挙、僧問、趙州、如何是祖師西来意。 師曰、爾舌頭是吾舌頭。

州云、庭前栢樹子。 師曰、覲面難呈向上機、家風万古為人施。

僧曰、和尚莫以境示人。 師曰、剛突眼睛看北斗。

州云、吾不以境示人。 師曰、不鳴條風帶春声。

僧曰、如何是祖師西来意。 師曰、明年更有新条在、撩乱春風卒未休。

州云、庭前栢樹子。 師曰、誰向這頭搥魚鰓。

今雖恁麼、更有永平道取、要聽麼。 良久云、歲寒知得青松意、又把靈根峯頂栽。

久立衆慈 伏惟珍重。

以上によつて、道元禪師がこの趙州栢樹子の公案を再三に互つて提唱されていることが知られると同時に、人・境の問が極限にまで一元化され、ついには大自然のみとなつた「栢

道元禪師と宏智頌古(黒丸)

樹子」の世界が現成していることを見ることができると。

また『永平広録』第九卷には、次の頌古二首ないし三首が存する。

(門鶴本)

無根栢樹掛虚空  
祖意西来何後前  
古仏守株枝葉落  
代他一語至天然

(流布本)

無根栢樹大虚懸  
祖意西来徹後先  
古仏守株枝葉落  
只留貞実一飽風煙

兀地何年歲積

雪霜一骨在庭前

趙州莫道西来意

古節中才豈自然

(上の一首なし)

有僧問道趙州老

只道庭前栢樹枝

端的之言雖是妙

但恨祖師来意遲

(上の頌に全同)

#### 第四十九則 洞山供真

挙、洞山供養雲巖真次、遂挙前邈真話。有僧問、雲巖道、祇這是一意旨如何。山云、我當時幾錯會先師意。僧云、未審雲巖還知有也無。山云、若不、知有争解恁麼道、若知有争肯恁麼道。

『永平広録』第七卷にこの本則を挙げた上堂語があり、禪師は頌の形式で洞山供真の宗旨をのべているが、それは宏智頌古に基づくもので、両者の間に宗義上の基本的な相違は見られない。

宏智頌古

争解<sub>二</sub>恁麼道<sub>一</sub>

五更雞唱家林曉

争肯恁麼道

千年鶴与<sub>三</sub>雲松<sub>一</sub>老

宝鑑澄明驗<sub>二</sub>正偏<sub>一</sub>

玉機転側看<sub>二</sub>兼到<sub>一</sub>

門風大振兮規步綿綿

父子交通兮声光浩浩

永平広録

争解<sub>二</sub>恁麼道<sub>一</sub>

明星出現大千曉

争肯恁麼道

鷄足山開迦葉老

古鏡円明照<sub>二</sub>正偏<sub>一</sub>

玄機高転自兼到

門風歴劫綿綿

父子声光浩浩

『宏智頌古』『永平広録』ともに雲巖のいう「祇這是」の

意旨について、後に洞山が示誨せる「若し有ることを知らずんば争か恁麼に道うことを解せん。若し有ることを知らば争か肯て恁麼に道わん。」との道取を挙げ、その能知・所知を超えた祇・這・是の境界を、洞曹五位（正中偏・偏中正・正中來・偏中至・兼中到）の宗旨によって巧みに表現していることが知られる。

第五十二則 曹山法身

挙、曹山問<sub>三</sub>徳尚座<sub>一</sub>、仏真法身猶若<sub>二</sub>虚空<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>物現<sub>レ</sub>形如<sub>二</sub>水

中月、作麼生説<sub>三</sub>箇底道理<sub>一</sub>。徳云、如<sub>二</sub>驢覷<sub>レ</sub>井<sub>一</sub>。山云、道即太黙道、只道<sub>二</sub>得八成<sub>一</sub>。徳云、和尚又如何。山云、如<sub>二</sub>井覷<sub>レ</sub>驢。

道元禪師は『永平広録』第五卷に右の本則を挙げているが、その示衆の語は宏智頌古に基づいていると見られる。

宏智頌古

驢覷<sub>レ</sub>井

井覷<sub>レ</sub>驢

智容無<sub>レ</sub>外

淨涵有<sub>レ</sub>余

肘後誰分印

家中不<sub>レ</sub>蓄<sub>レ</sub>書

機糸不<sub>レ</sub>掛梭頭事

文彩縦横意自殊

永平広録

驢覷<sub>レ</sub>井井覷<sub>レ</sub>驢

井覷<sub>レ</sub>井驢覷<sub>レ</sub>驢

身容心儀無<sub>レ</sub>限

応物現形有<sub>レ</sub>余

活眼環中照廓<sub>レ</sub>虚

芥城劫石妙窮<sub>レ</sub>初

腰頭縦帯<sub>二</sub>風流袋<sub>一</sub>

家裡何無<sub>二</sub>一字書<sub>一</sub>

本則と宏智頌古の驢、井を覷、井、驢を覷るという公案の宗意を、永平広録では更に井、井を覷、驢、驢を覷るとして透徹した一元の境地を開き、また宏智頌古第三・四句の智・浄の語に対して、広録では同じく第三・四句に身・心・応・現の語を用いて、本則の「仏の真法身」を直截に開示されるなど、この頌古には禪師の公案拈提の特質を見ることができると思う。

(未完)